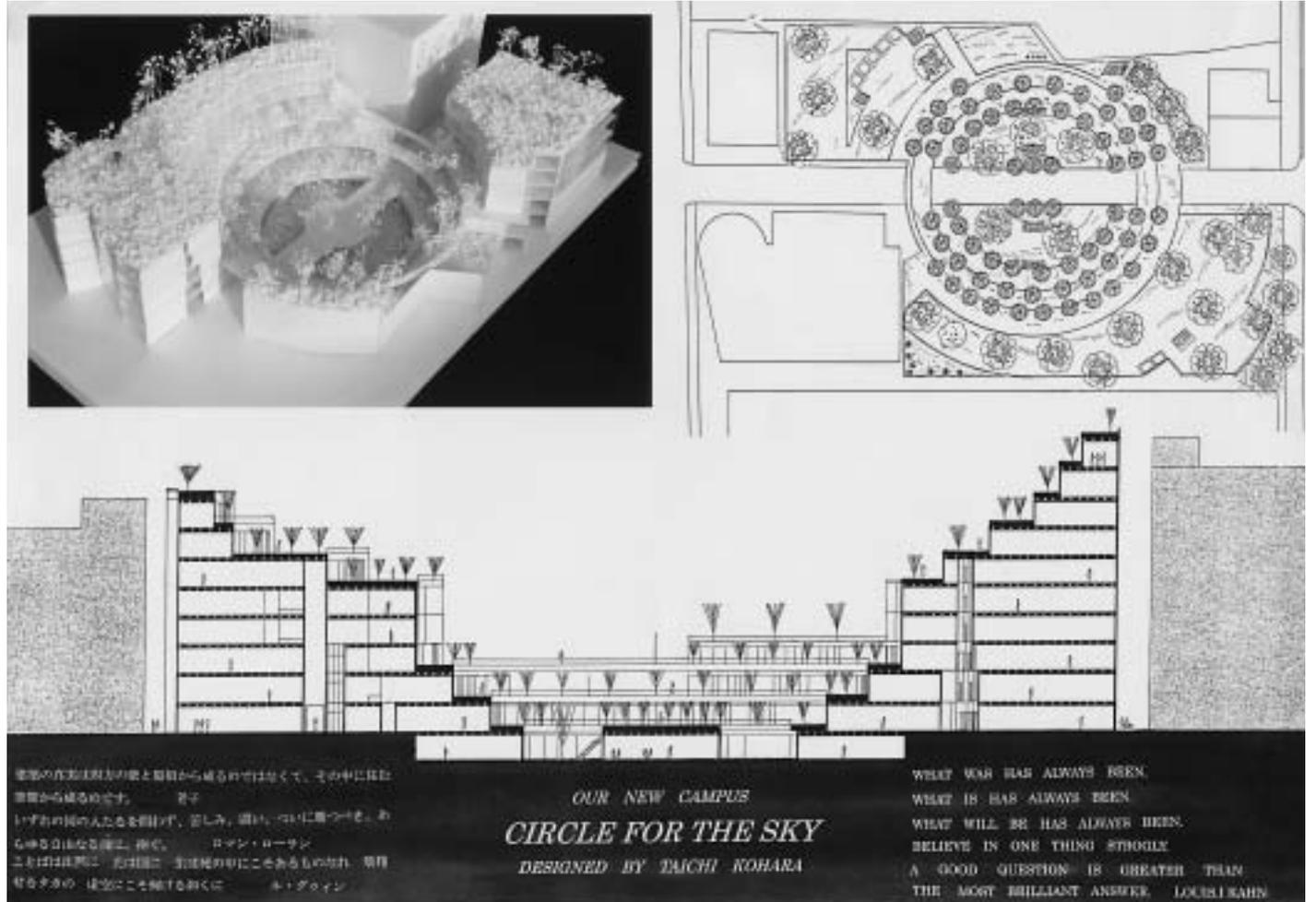


小原 太一



設計演習 I

第1課題
私の大学再生計画

第2課題
礼拝堂・教会もしくは
葬斎場・墓地

3年2組

担当：
椎名 英三

【第1課題】

小原 太一

高層ビルが林立する巨大都市東京。その中心にある私達の大学。建築の本質とは、その虚なる部分にあると思う。だから僕は、この大学を再生するに当たり、都市の位置付けとして虚なる部分と緑に囲まれたキャンパスを提案した。都市の中の大学を考える上で大切なことは、都市とどのように関係していくか、そして私達はどのようにしていたいかだと思ふ。

この計画は、そのような意味で都市の中の大学の在り方について提案する。

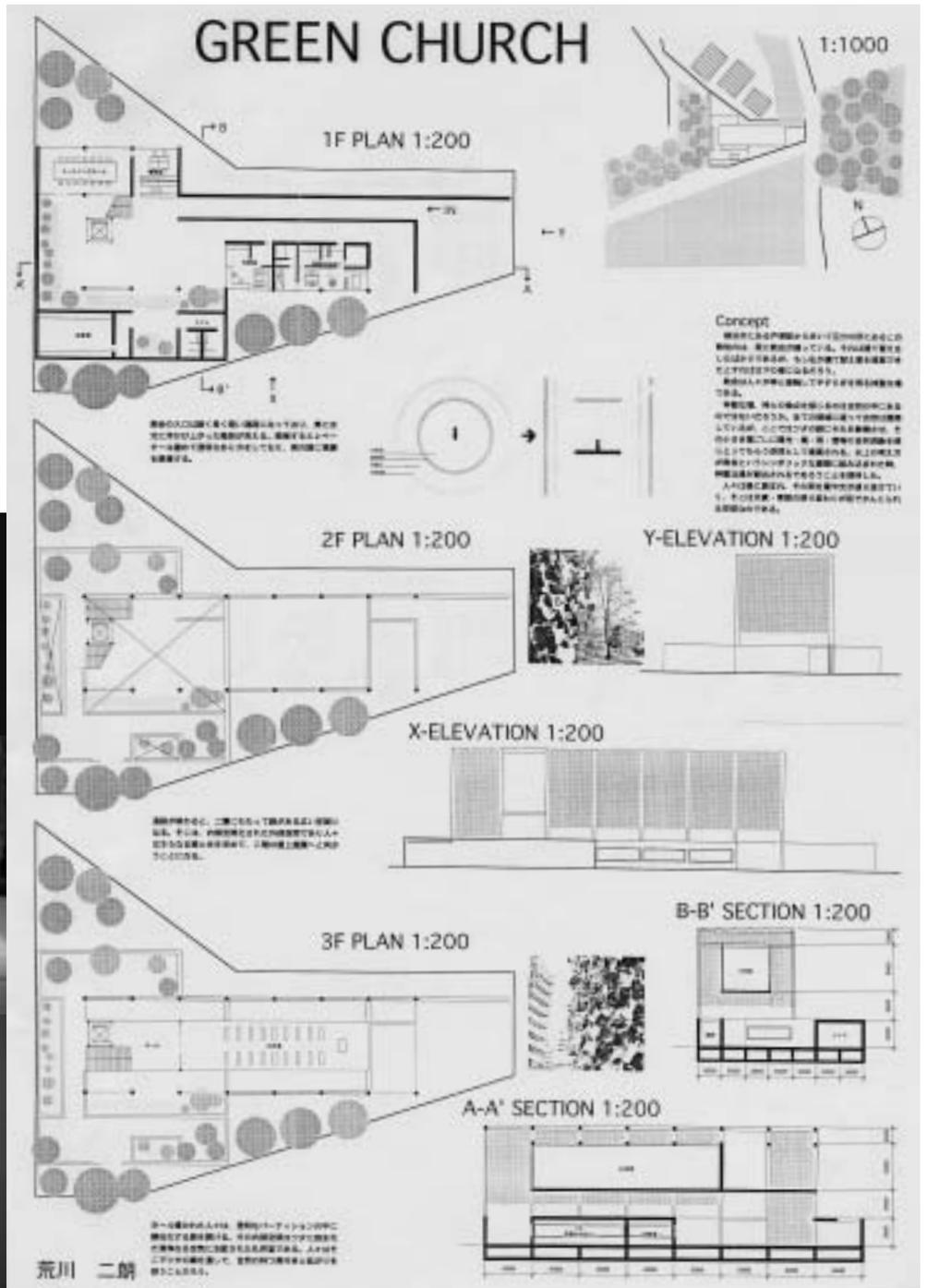
指導=椎名 英三

私達が今、日々を過ごしている駿河台校舎に対して、果たしてどのような魅力を君は感じているのだろうか。もしくは、どのように魅力を感じていないのだろうか。日常的に体験できる学生生活の中で、このような都市の中に建つ大学の校舎、キャンパスに対して、何が問題であるのかを自らが発見し、その問題を解決すべく、どのような答を導きだすことができるのか、がこの課題の狙いである。

小原太一君の答は、それは虚であるとしている。小原君は老子が紀元前4世紀に言った「建築の真実性は、その屋根や壁にあるのではなく、それらによって囲まれた虚なる内部の空間にあ

る」という言葉にそれを例えている。キャンパスの中心に、緑溢るヴォイドスペースを設定し、各教室群はヴォイドスペースを巡って展開している。グラウンドレベルにおいては、既存の道路が貫入し、とかくスタティックになりがちな円形プランに、ダイナミズムが付与されている。このプランとセクションを見ていると、大学は正に巨大なオープンシアターに変貌したかのように感じられる。それは見る見られるの可逆的な関係が常に発生している劇場であり、現在のキャンパス不在の駿河台校舎に対して、大学のキャンパスにとって何が大切なかを強く訴えかけているかのように感じられる作品になっている。

荒川 二郎



【第2課題】
荒川 二郎

横浜市にある戸塚駅から歩いて5分の所にあるこの敷地には、すでに教会が建っている。それは建て替えをしたばかりであるが、もし私が建て替え案を提案できたとすれば以下のようになるだろう。

教会は人々が神と接触して安らぎを得る神聖な場である。神聖な場、神との接点を感じるは自然の中にあるのではないだろうか。全ての領域に渡って自然は展開しているが、ここで

はツタの緑にそれを象徴させ、その小さき葉ごしに陽光・風・雨・雷などの自然現象を感じとってもらう空間として提案される。以上の考え方が教会というシンボリックな建築に組み込まれたとき、神聖な場が創出されるであろうことを期待した。

人々は緑に囲まれ、その間を風や光が通り抜けていく、そこは天候・季節の移り変わりが肌で感じられる空間なのである。

指導＝椎名 英三

建築という物理的の大きさに至って初めて現出する空間は、一般的な他分野のアートではなし得ない次元のものである。建築の美的表現領域としての、空間を感じる喜びとでもいえる素晴ら

しさを、建築はいかにすれば獲得できるのだろうか。空間を感じるということは、一体どうということなのだろうか。建築を空間として認識する力がないと、いくら整合性をもった建造物を設計したとしても、それは建物ではあっても、建築には到達していないと私には思える。

それ故この課題では、空間としての建築を考察するトレーニングをすることが重要なところである。

荒川二郎君の案は、ツタの絡まるグリーンなスクリーンで空中に浮遊した礼拝堂を囲み込むことによって、雑多な外界から逃れ、精神性の高い空間を創り出すと同時に、その建築が建つことによって、周囲の環境に物質

としての建築のヴォリュームを消去したツタの緑を提供するという考え方をもって設計されている。そのように礼拝堂を象徴的に扱うために、建築のその他の施設を平屋部分にまとめてレイアウトするという方法をとっており、その屋上は緑化されるという。礼拝堂へのアプローチについても、訪問者はいきなり暗い廊下に通され、緑のスクリーン越しの清浄なる光が降り注ぐ中庭に出て、上階へと導かれるが、光の素晴らしさをそこで感じないわけにはいかないだろう。屋上庭園のサーキュレーション、礼拝堂とそこへ至るホールとの間仕切壁の重さなど疑問もあるが、学生らしい清新な案として評価できる。